

2013年
11月8日
金曜日

久保 真 准教授（経済学史）

「役に立つ」システム

私の専門は「経済学史」という分野です。経済学が歴史上どのような発展してきたかを考える学問分野で、主として過去の経済学者が書いたものを調べています。そうしたことをやっている、「大昔の人の書いたものなんて読んで何の役に立つの？」などと言われることがありません。もちろん私は「役に立つ」と思っています。そういう指摘をする人の言う「役に立つ」と私のそれとはかなり懸隔があるのではないかと思います。感じて受けてきました。そこで、学問、いやもっと一般的に「知る」とか「わかる」とかいうことが「役に立つ」とはどういうことなのか、ちょっと考えてみましょう。

ベストセラーになった養老孟司さんの『バカの壁』（新潮新書、二〇〇三）という本のなかに、面白い話が載っています。彼は「知る」

「わかる」とはどういうことか考え続けてきて、至った結論が、わかるというのは癌で余命半年と告知されるようなものだ、ということだったそうです。すなわち、今余命があと半年だと告知されてご覧下さい。

いつも見慣れた風景が告知された後も同じように見えると思いませんか。そんなことはない。それ以前とは全く違って見えるはずだ、というのです。別言すれば、ネットでググれば大概のことはそれを説明している文章をすぐに読むことはできるけれど、それは「知る」「わかる」ということじゃない。「知る」「わかる」というのは、何かこう見え方がガラッと変わるような経験を伴うようなものなのだ、というのです。

私も、「知る」とか「わかる」とかが「役に立つ」とすれば、それはものの見方を変えてくれるという点

に重きを置いています。例えば、入学したばかりの学生さんたちに大学時代に何を学びたいか聞くと、英語ができるようになりたいという答えが多い。どうしてかというところ、就職に役立ちそうということかも知れません。でも、上のような意味で「役に立つ」ということを考えてみると、ちょっと違う感じがする。むしろ、例えば、英語ができるようになって「世界各地でバックグラウンドの違う人たちと話してみたら、ああこんなひどい環境があるのか、私の悩みなどちっぽけなのだなあ、もっと自分にはやれることがあるんじゃないか、という気になった」というほうが、英語を知ることが「役に立つ」という感じがします。この意味で「知る」ことが「役に立つ」というならば、それは、自分は自分として不変なものであって、そうした変

わらない自分が新たに得た知識や理解を使えば何か得をするというのではなくて、主体側の見方や思考を変えてくれるようなモメントを含むようなものだということになるでしょう。

このように考えると、大事なことは、自分自身を不変なものだと考えずに自分を変えてくれるかもしれないような知識や経験を得るような権えをもつこと、それまでの自分に突き刺さってきて自分自身を変えてくれるような、そういった意味で「役に立つ」ものに関わることだと思えます。皆さんにも是非そうあって欲しいし、私自身も、研究や教育を通じて、自分自身を含む多くの人々の見方や思考を揺さぶることができればと考えています。

私も、「知る」とか「わかる」とかが「役に立つ」とすれば、それはものの見方を変えてくれるという点